
Call to Arms

森田 ミヤジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Call to Arms

【Nコード】

N9847X

【作者名】

森田 ミヤジ

【あらすじ】

暗黒渦巻く異世界。

空が、大地が、そして人々が悲嘆に涙を流す時 神からのCall to Arms（＝召集命令）を受けた男達が、異世界に舞い降りる。

一

その世界は暗黒に包まれていた。

地底より復活した魔王が、その強大な魔力でもって世界を光の射さぬ地獄へと変えてしまったのである。

大地は腐り、海は荒れ、人々の悲しみの涙は枯れることが無い。

力持つ者は魔王に挑み、滅び去った。

力無き者は神に祈り、その慈悲を乞うた。

だが、救いはもたらされないままに時は過ぎていく。

人々の抵抗する力も、信仰する心も擦り減っていき、全ての希望が絶望へと塗り替えられようとしていた時である。

異世界より、二人の男がこの世界を救う為に召喚された。

神は世界を見捨てはしなかったのだ。

二

夜の闇の中。

ホルトソートの村は、全てが死に絶えていた。

家は焼け落ち、畑は枯れ、川は干上がっている。

動いている影は全く見当たらない。

家畜の鳴き声はおるか、虫の羽音さえも聞こえなかった。死のもたらず静寂。

それだけが、そこにはあった。

ここは魔王の居城から最も近い村だという。

ただそれだけの理由で、村人たちはあらゆる場所で無残に虐殺され、その骸を野に晒されていた。

槍で胸を貫かれ、そのまま壁に貼りつけられている老人。

真つ二つに引き裂かれた若い女。

抱き合ったまま道端で息絶えている二人の少女。

姉妹だろうか？それとも親友かもしれない。

酸鼻を極めるその村の有様を丈高い茂みの中から見、二人の男はほぼ同時に舌打ちを洩らした。

「……何て言えば良いのか……これはひどすぎますよ」

「ああ。魔王だか何だか知らんが、これをやった奴が最低のクソだつてのは確かだ」

アーロン・ケイヒル軍曹とシヨーン・ウィーリス伍長は、足の踏み場もないほど屍で溢れかえっている道を、身を低くして素早く進み、まだ幾分かはその形状を留めている教会の廃墟の中へと滑り込んだ。

その内部は惨憺たる有様だった。

ステンドグラスは粉々に砕け散り、壁は一面、おびただしい返り血で真つ赤に染まっている。

その床には物言わぬ死骸が、整然と一列に並んでいた。

おそらく、壁の前に立たせて、順に殺していったのだ。

思わず目をそむけたくなるほど、悪趣味で残虐な光景だった。

だが、男達はプロフェツショナルである。

胸中に耐えがたい嫌悪感と義憤を燃え上がらせてはいたが、立ち止まって呆然としたり、死骸の山を見て嘔吐したりはしない。

二人はそれぞれに散って、建物の内部をクリアリングしていった。閉まっている扉を蹴り開け、ハンドガンを構える。

全ての部屋をそうして確認して回ったが、敵の姿は無かった。

続いて、建物の梁を支えている柱の状態を確かめ、すぐに倒壊する心配は無さそうだと判断すると、かねての予定通りに礼拝堂の南側の壁の前に立つ。

「始めよう。さっさとクソ野郎を始末して元の世界に帰るぞ、シヨ

ーン」

「ええ」

ランダルナイフを手にしたシヨーンは、まだ去年の夏に二十歳になったばかりの若年ながら、いかにもプロフェツショナルらしい手際の良さで土壁を削り、崩していく。

ちょうど小窓くらいの大きさにまでその穴が広がったところで、バツクパツクから二脚バイホッフを取り出して素早く組み立て、その上にアーロンの背負ってきた『バレットM82』のおそろしく長大な銃身をセツトした。

続いてはライカの双眼鏡を取り出し、それを覗いては少しずつ銃口をずらし、覗いてはずらしを繰り返して、念入りに射角を調整する。それはミリ単位の正確さが要求される、狙撃という一連の行為の中で最も気を使う作業であった。

無論、その銃口を向ける先は魔王の城である。

シヨーンが銃のセッティングを行っている間に、射手であるアーロンは、オーレリア城で手に入れた羊皮紙の地図を広げ、大まかな狙

撃距離とそれにともなう着弾落差を、できるだけ正確なイメージとして脳裏に描くという作業に取り掛かっていた。ある程度の目算を立ててから、アロンは這いつくばって穴から魔王城を覗き、そのテラスをスコープで確認する。

(千二百ヤード(≒約1.1km)ってところだな……)

超一流と呼ばれるクラスの狙撃手の例に漏れず、アロンは未だかつてこういった目測を誤ったことが無い。

果たして、隣のショーンがレーザーでの測距を行って「千二百ヤード」と告げた。

(ゴンゴ)

アロンは満足して、そのままうつ伏せに横たわった。

ショーンもミルドット・スコープの焦点の微調整を終え、自分の仕事をやり遂げたという満足感とともにアロンの隣へ寝転んだ。後はもう待つだけである。

最高のタイミングで引き金を引く、その時を。

三

空は相変わらず暗雲に覆われていたが、ほんのかすかに闇が薄まり、周囲の視界が白んだように見えたので、夜が明けたのが分かった。二人はもう何時間もスコープを覗いたまま待機している。

待機。
スナイパーの仕事の九十九パーセントはこの作業に費やされる。

「アーン」

「なんだ」

「召喚された時にこのM82みたいなライフルを担いでいて良かったですね」

「そうだな。レミントンじゃあ、魔王様を倒せるかどうか怪しいもんだ」

「ええ」

「魔王がこいつを見たら腰を抜かすぜ」

「『ワオ！対戦車ライフルだど？』」

「『ヤバい、ケツが二つになっちまう』」

二人は少しだけ乾いた笑いを上げてから、すぐに押し黙った。

「……」

「……」

会話が途切れ、沈黙が訪れる。

戦場での狙撃手と観測主がそうであるように、この二人も待機中は十秒以上の会話をしない。

狙撃術を第二の本能になるまで訓練し尽くした男達にとって、それは癖のようなものだった。

そうして十分後に、再びぽつりと会話が始まる。

「……俺達をこの世界に連れてきた、あの小娘　自分で神だなんて名乗ってやがったが……」

「信じるしかありませんね。実際に異世界に連れてこられたんですから」

「……」

アーンは低く呻いた。

彼は歴戦の兵士ならではの超現実主義者である。

オカルトだのジンクスだのというものに対しては完全に懐疑的であり、そんなものを信仰し、有り難がるのはただの現実逃避だとさえ思っていた。

だが、今回の異世界召喚の件に関してはその考えを根底から揺さぶられた。

まさに青天の霹靂である。

「くそ、忌々しいな」

「しょうがないです、神様のすることですから。でも、人選としてはこの上無いでしょう。何と言っても当代最高のスナイパーを召喚したんだから」

「俺が神様ならクラスターミサイルを装備したステルス機をパイロット付きで召喚するがね」

「それはフェアじゃないです」

「そうか？魔王相手にフェアである必要が？」

「そりゃそうです。こっちは勇者なんですからね」

「……」

「……」

再び沈黙が訪れた。

また、十分後。

「一つ聞いてもいいですか？」

「なんだ」

「元の世界に戻ったら、何をします？」

「そうだな。まずは熱いシャワーを浴びて、髭を剃って、ラッキー 스트ライクを一服ふかしてから柔らかいベッドで寝る」

「いいですね」

「お前は？」

「私は……」

「なんだ？」

「私には何もありませんよ」

「……」

「……」

十分後。

「どういう意味だったんだ？」

「何がです？」

「さっきの言葉だ。『何も無い』」

「ああ……」

「場合によってはお前をぶん殴るぞ。死にたがってるんじゃないやあるま
いな？」

「違います、私は……」

「言え」

「私には帰る場所が無いんです。家族もいない。孤児だったんです。
妻も娘もいない」

「だから軍隊に入ったのか？」

「ええ」

「……」

「……」

十分後。

「お前の本音を当ててやろうか？」

「え？」

「あのお姫様だ」

「……」

「オーレリア城の……ええと、名前は何だったかな」

「『リティア・ディア・オーレリア』」

「そう、リティア姫だ。三日間の内に随分と仲良くなってたみたいじゃないか？」

「そんなことは……」

「確かに、あんなに美しい女は俺達の世界にはいないからな。おまけに人柄も文句無しだ」

「……」

「……」

十分後。

「……凶星です、アaron」

「そうだろうな」

「あんな女性には出会ったことはありません。美しくて、気高くて、そして忍耐強い人だ。ずっと一人で国民を鼓舞しながら魔王の軍勢と闘ってきたんです」

「……」

「気がついたら、もうダメです。完全に姫の虜になっていました」

「……」

「……」

十分後。

「……この世界に残るんだな？」

「……ええ。そのつもりです」

「相手は一国の姫君だ。ハードルは高いぞ？」

「望むところですよ」

「そうか……」

「アaron？」

「男の決めた事だ。俺は何も言わん」

「アーン、私は……」
「待て」

二人の間に緊張が走った。

そう、千二百ヤード先の魔王城のテラス。

そこに魔王が姿を現したのだ。

四

思わず吐き気を催すほど醜い姿だった。

でっぷりと肥満した、ぶよぶよの青黒い身体。

その下半身には、タコのような触手がヌメヌメと何本もうねっている。

つるりと禿げあがった頭には豪華な金細工の冠を乗せていて、それを愛おしげに撫でながら気味の悪い笑みを浮かべて、己の征服した世界を見下ろしている。

その恍惚とした表情からは、優越感と満足感が見てとれた。

（なるほど、嫌な野郎だ。生かしておく理由は無えな）

アーンはそう判断した。

隣のショーンも、言葉は一言も発しなかったが、その全身からは激しい嫌悪と怒りを発していた。

「今、撃てますか？」

ショーンはスコープを覗いたまま、訊いた。

「撃つ」

「お願いします」

「シヨーン、お前のこれから生きていく世界の為に引き金を引くぞ」

「アーロン、私は……」

「もう黙れ。集中させる」

時は来た。

アーロンはしっかりと銃身を身体に引きつけて保持し、肺に空気を半分ほど溜めこんで、止める。

照準の十字は魔王の禿げ頭に合わせ、そこでぴたりと止めた。

己の身体と、この長重なライフルが完全に一体になる。

心に静謐が訪れる。

それは崇高な瞬間だった。

アーロンは完全に無心になっていた。

殺意も敵意も憤怒も悲哀も歓喜も無く、意志さえも無い。ただ、本能だけがゆっくりと引き金を引き絞っていく。

（お前を捉えたぞ）

銃声が響いた。

射撃の反動で、ぐん、と銃床が肩に食い込む。

スコープの向こうで、王冠と血と目玉が宙に飛び散った。

五

「チヨロい奴だったな」

黒い雲の間から光が差し始め、世界を少しずつ明るく照らししていく。

それは、まさに世界の再生を予感させるような、美しさに満ちた光景だった。

二人の男は教会の屋根の上でその様子を眺めている。

「この世界はこれで救われたんですね」

「まあ、上出来だな」

「私達の世界も、一発の銃弾で平和にできれば言うことは無いんですが……」

「そうなら俺達は廃業だ」

アーンは屋根から滑り降りると、手早くバレットを布でくるみ、遅れて滑り降りてきたシヨンに向かってその銃を放り投げた。

「おつとと……」

シヨンは慌ててそれを受け止める。

「大事に扱えよ。世界を救った聖なる武器なんだからな」

「ええ」

「シヨン、そいつと一緒にオーレリア城へ行って帰還報告をしる。デブリーフィング魔王を倒した英雄になるんだ。ちつとは姫に釣り合う男に見えるんじゃないか？」

「あなたは……？」

「俺は自分の世界に戻る。ここで別れよう」

「そんな……！」

「手柄は一人の物にしたほうが良いに決まってる。そうだろうか？」

「手柄も栄光もあなた一人のものです。私はセッティングをしただけだ」

「くだらん事を言うな。そもそも、俺にはこの世界で欲しいものは何も無いんだ」

「アーロン、そんなことは」
「俺は戦いの無い世界では生きられない、物騒な男なんだ。平和になつた世界には場違いだろう?」

シヨーンはそれ以上何も言わなかった。

この頑固な上官は、一度言ったらそれで最後、絶対にプランを変更したりはしない一途な男だということは分かりきっていたからである。

それでもなお、心には葛藤があった。

上官が元の世界へ帰還することを祝う心と、戦友との永遠の別れを惜しむ心との葛藤である。

背反する感情に苦悶する部下を見て、アーロンは優しく微笑んだ。

「シヨーン、短い間だったが、お前は最高の相棒だったぜ」

「アーロン……」

互いにどちらからともなく歩み寄り、がっきと強く抱きあった。

「あなたを兄のように思っていました」

「俺は弟のように思っていたよ。元気だな」

アーロンはシヨーンを離すと、カービンライフルのダブル・ループ・スリングを頭から通してかけ、振り返りもせず去っていった。

シヨーンはその後ろ姿が見えなくなるまで、いや、見えなくなってもずっと、敬礼の姿勢をとり続けていた。

その頬に熱い涙を伝わせながら、いつまでも。

木漏れ日の下を、アーロンは歩き続けた。しばらく行くと森を抜けて、街道に出る。爽やかな風が平野を吹き抜けていった。

「ほう……」

その世界の美しさに、アーロンは感嘆の声を洩らす。稜線には美しい山並みが連なり、その上には目の覚めるような青空があった。

道端には何人かの人々が立ち、自分と同じように空を眺めて、歓喜の声を上げている。

それを見て、アーロンは苦笑いを浮かべた。

(……良い気分じゃないか？ガラにもないな……)

誰も褒めてはくれないが、誇らしい気分だった。

自分達は間違いなく、この世界を救ったのだ。

言葉にはできない満足感と、達成感が全身を満たしていた。

「あの、こ、ご苦労様でした、勇者……」

「？」

アーロンが背後の声に振り返ると、そこにはかつて見た少女の姿があった。

「おっと『神様』、お久しぶりですな。我々のご期待に添えましたかな？」

「は、はい、素晴らしいです。まさか、こんなにあっさりこの世界の魔王を倒してしまうなんて、思いませんでした……凄いです、

最速です、完璧です……」

少女神は相変わらず気弱そうに、ブツブツと下を向いたまま喋る。自分のひらひらしたスカート裾を引っ張ったり摘んだりしている落ち着きの無さは、お前は本当に神なのか、と一声張り上げたくなるくらいに頼りない。

だが、こんな晴れの日になんな無粋はするまい、とアーロンは寛容な心でもって接することにした。

「では、神様、私めを元の世界に戻してくださいますかな？俺だけでいいんだが？」

「あの、そのことなんです……」

「おいおい、まさか、できないとは言わんだろうな」

「そ、そんなこと無いんですけど、その、えーと……」

おっと、嫌な予感がするぜ。

アーロンは眉をひそめて、続きを待った。

「じ、実はですね、こことは違うもう一つの世界も今、危機に瀕しているんです」

「……なんだって？」

「その世界は、深海から復活した海魔によって海に没しようとしているんです。一刻の猶予も無いのです。絶体絶命なのです……」

「俺にそこへ行けと？」

「……はい」

少女神はキュッと唇をつぐんで、上目遣いにこちらを窺う。

「勇者アーロン、お願いです」

「冗談じゃないぜ……」

アーンは溜息を吐いて、天を仰いだ。そこにはどこまでも広がる青空がある。太陽のあまりの眩しさに、目を細めた。

(『勇者アーン』だと……?)

地上に目をやると、子供達はその青空に向けて凧を飛ばし始めている。

大人達はその様子を笑顔で見守っている。

その、あまりにも平和すぎる光景は、アーンの心を揺すぶった。彼はもう一度溜息を吐いた。

「……まあ、元の世界に戻っても、無断外出の罪で最低一週間の倉入りだしな……」

「？」

「しょうがねえ。もう一個、世界を救ってみるとするか？」

「！」

アーンの言葉に、少女神の顔がパツと明るくなった。

「さ、さすがです、さすがは勇者です……男らしいです……ときめきます……」

「くだらん事を言うな」

アーンは吐き捨てるように言うと、カービンライフルの弾倉を外して残弾を確認し、再びそれをマガジンキャッチへと叩きこんだ。

「さあ、いいぜ。さっさと次の世界へ連れて行けよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9847x/>

Call to Arms

2011年10月28日02時08分発行